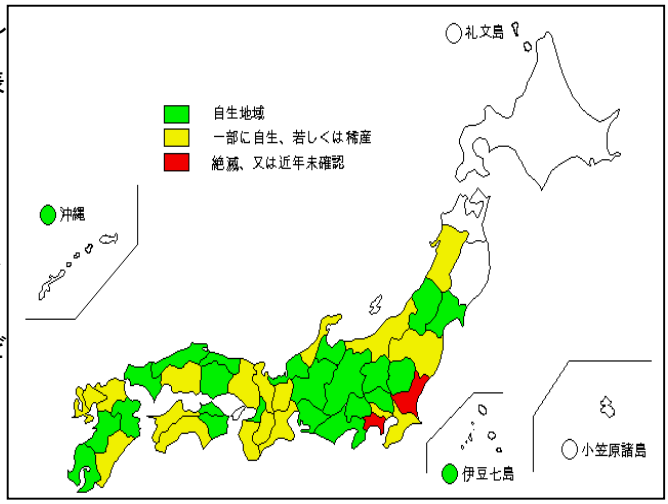
#265

ヒメフタバラン（ムラサキフタバラン）

Listera japonica

ヒメフタバラン（愛知県奥三河　09.3/21）

全国に自生する小型の野生蘭です。ラン科の植物では珍しい双子葉植物の発芽のような綺麗な2枚葉で面白い蘭です。3～4月頃に2枚葉の中央から花茎を伸ばし、なんとも表現しがたい変わった形の花を咲かせます。花色は茶色が基本色ですが、緑色～明るい茶色までかなりの個体差があります。葉も緑のものから中央に1本白や黄色の縦筋が入るもの（斑入りではありません）まで変化に富みます。草丈は葉までが2～30mm、花茎を入れても100mm程度で非常に小さく、さらに全体的に地味で目立たないため、一見してラン科の植物と気づかれる方は少ないのではないでしょうか。太い根や鮮やかな花弁、肉厚で光沢のある葉などラン科らしい特徴は全くありません。沢沿いの湿った杉林などを好み、アケボノシュスランやベニシュスラン、クモキリソウなどと一緒に自生している姿も目にします。



寒冷地を除く全国の冷涼な山地に自生します。

ヒメフタバラン（愛知県奥三河　09.3/21）

草丈が小さく他の植物との生存競争では勝ち目が薄いため、ライバルの少ない開けた場所に自生します。コケの絨毯の真ん中とか林道脇などでも見られます。大抵は大群落を形成し、あるところには足の踏み場も無いほど群生しており、無いところには全くありません。だから、自生量は多くても、環境の変化で即絶滅につながる危うさを秘めております。ただ幸いにも盗掘の被害は少ないようです。それは発見しずらいことと、地味で目立たないので人気が薄く商品価値が無い為だと思われます。ですから当面の敵は公共工事等の山林開発です。

Document and photo by LittleFlower 2009

フタバラン属にはいくつか種類がありますが、開花時期は本種が一番早いです。（沖縄では2月から開花が見られます） アオフタバランは本種よりやや涼しい場所を好み、花色は緑で開花は8月頃です。葉は濃い緑色で複数の白筋が入ります。タカネフタバランは亜高山性で、明るい緑色の葉でやや丸みを帯びており、8月頃開花。花色は緑でリップの先はやや丸いです。ミヤマフタバランも亜高山性で開花は8月頃。花色は茶色で花は他種よりも小さく丸みを帯びています。コフタバラン（フタバラン）も亜高山性で、葉はタカネフタバランに似ていますが、花は子房部より花弁が小さく他種とは一目で見分けがつきます。開花は7～8月頃。コアツモリソウも草姿は本種にそっくりですが、ふた周りほど大きく花も立派なアツモリソウ類の形でフタバラン属ではありません。

ヒメフタバランの葉（愛知県奥三河　09.5/01）

花のアップ（愛知県奥三河　09.3/21）

販売ルートにはまずのらないため入手は困難です。たまに野草店などに並んだとしても盗掘株をそのまま売っている可能性が高いので購入はお控え下さい。お育てになっている愛好家にお譲りいただくか、自生地をご存知でしたら1,2株の採集でしたら植生に影響は無いと思います。（私は盗掘は断固反対論者ですが、それはお金を目的とした大規模盗掘であり、個人的に1,2株野生植物を採取する程度であれば、そんなことまで咎めたくはありません。但し、ラン科の植物についてはこの限りで無く、多くの種が「この程度の採集」でさえ自生地に致命的なダメージを与えるほど深刻な状況になってしまっています。これはかつて繰り返し行われてきた乱開発及び金銭目的の悪質な大規模盗掘によることは誰の目からも明らかですが、過去の悪人をせめても自然が帰ってくるわけではありません。そんな種については、法律がどうであろうと個人採集であってもお控え下さい。これはルールではなく人としてのモラルの問題です。）

栽培は比較的容易です。夏から春までは長い休眠期で地上部は枯れていますので、涼しい場所で管理してください。（山ゴケを鉢いっぱいに植えて、その中に植え込んでおくと潅水などの管理がしやすいですが、一年の内大半は「コケの鉢植え」になってしまいますので、他の小型山野草との寄せ植えをおススメします）　増殖も期待でき、環境が会えば自然実生でも生えてきます。但し、種子の成熟が非常に早い（7月頃には成熟する）ので、取り播きをする場合は自然に散開してしまわないよう気をつけてください。また、トキソウのように根の何の変哲もない部分から新芽がでて株が分岐して増えて行きます。

ヒメフタバラン（愛知県奥三河　09.3/21）